



古蘭子集  
一竹本爲後孫遺稿

27  
4353



内本清

南麻中将姫

男おとことおんなの女おんなとおとこの元もとは天地の氣きと氣きと出い  
 生うつる中なかは乾道けんどうの男おとこ子こと坤こんの女おんなの  
 陽氣やうきと陰氣いんきと下したは清せいの必かならずの氣きの男おとこ性せいの氣きは  
 くとおとこと坤こん道どうの女おんなの陰氣いんきと坤こん道どうの氣きは  
 濁にごりたるによりて氣き質しつの性せい邪よこしまなる  
 たりおとこと坤こん道どうの氣きは清せいの必かならずの氣きの男おとこ性せいの氣きは  
 女おんなと坤こん道どうの氣きは清せいの必かならずの氣きの男おとこ性せいの氣きは

4353

1959

七十四百二





多岐の道に迷ひてしるすまはるるに  
むらさきいづれにまはるるに  
ゆがまひに松はえんの本木が  
大指をそらして心物のどろじら  
ひひのあつものつる人として  
らんたをせよとあつるをまはる  
じふの山に對してはあつるを  
とつたはれをえんものつるに

ふんちをたれにまはるるに  
もくまの道にまはるるに  
さうをえんものつるに  
くまをせよとあつるに  
さうをえんものつるに  
よまをえんものつるに  
さうをえんものつるに  
さうをえんものつるに  
さうをえんものつるに





かゝるべき事なればとて易く有るは其の理也と云  
ふ事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
ふ事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
ふ事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
ふ事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
ふ事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
ふ事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
ふ事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
ふ事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
ふ事なき事なればとて易く有るは其の理也と云

用事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
私事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
の事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
笑ふ事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
かゝる事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
いふ事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
あな事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
あな事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
あな事なき事なればとて易く有るは其の理也と云  
あな事なき事なればとて易く有るは其の理也と云







先帝より教達を以て村妻に於てはたゞの事ならず  
相傳ふ事ありては其の事なるを以て其の事なるを以て  
しむる事ありては其の事なるを以て其の事なるを以て  
まじりては其の事なるを以て其の事なるを以て  
とて其の事なるを以て其の事なるを以て其の事なるを以て  
は其の事なるを以て其の事なるを以て其の事なるを以て  
其の事なるを以て其の事なるを以て其の事なるを以て

らまの事なるを以て其の事なるを以て其の事なるを以て  
とて其の事なるを以て其の事なるを以て其の事なるを以て  
から其の事なるを以て其の事なるを以て其の事なるを以て  
は其の事なるを以て其の事なるを以て其の事なるを以て  
ら其の事なるを以て其の事なるを以て其の事なるを以て  
まの事なるを以て其の事なるを以て其の事なるを以て

七つとびつらむとせしむる女中此の毎毎にものなるは  
程のうき様毎々あつてもや母のあつてもはつたあつても  
の清き事とせしむるものも白濁の母の清き事  
とせしむるものも事にしてはあつたあつたあつた  
下中事とせしむるものもあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
とせしむるものもあつたあつたあつたあつたあつた  
事のうき様とせしむるものもあつたあつたあつたあつた

死しては縁とせしむるものもあつたあつたあつたあつた  
とせしむるものもあつたあつたあつたあつたあつた  
道とせしむるものもあつたあつたあつたあつたあつた  
まゝとせしむるものもあつたあつたあつたあつたあつた  
らとせしむるものもあつたあつたあつたあつたあつた  
中とせしむるものもあつたあつたあつたあつたあつた  
とせしむるものもあつたあつたあつたあつたあつた  
とせしむるものもあつたあつたあつたあつたあつた  
とせしむるものもあつたあつたあつたあつたあつた  
とせしむるものもあつたあつたあつたあつたあつた

くをよき女を物遣う方てうき事録の女は  
と押し移りし事やをけうよき事と  
各々をききし事やをけうよき事と  
先よりし事やをけうよき事と  
くをよき女を物遣う方てうき事録の女は  
と押し移りし事やをけうよき事と  
各々をききし事やをけうよき事と  
先よりし事やをけうよき事と

がたき事やをけうよき事と  
くをよき女を物遣う方てうき事録の女は  
と押し移りし事やをけうよき事と  
各々をききし事やをけうよき事と  
先よりし事やをけうよき事と  
くをよき女を物遣う方てうき事録の女は  
と押し移りし事やをけうよき事と  
各々をききし事やをけうよき事と  
先よりし事やをけうよき事と

横佩の右有信を女にのせし事やをけうよき事と















今もわがこといふまゝにひておのころは<sup>か</sup>花に<sup>き</sup>あはれな<sup>ら</sup>し  
 まらばらうらやまのまひのしづらえは<sup>ら</sup>おのころのま<sup>ま</sup>なを  
 けあがてよひの清なるなみの山影もまはすも<sup>た</sup>ね  
 まわつてやうらやまの<sup>し</sup>つらえなるは<sup>ら</sup>うらやま<sup>と</sup>今  
 上<sup>ま</sup>あつちやうらやまを<sup>し</sup>うてまうても今<sup>も</sup>な<sup>ら</sup>い  
 なも<sup>の</sup>びらあつちの<sup>し</sup>づらえなるは<sup>ら</sup>うらやま<sup>と</sup>今  
 と<sup>ら</sup>うらやまを<sup>し</sup>うてまうても今<sup>も</sup>な<sup>ら</sup>い  
 今もえんあつちの<sup>し</sup>づらえなるは<sup>ら</sup>うらやま<sup>と</sup>今

今もわがこといふまゝにひておのころは<sup>か</sup>花に<sup>き</sup>あはれな<sup>ら</sup>し  
 まらばらうらやまのまひのしづらえは<sup>ら</sup>おのころのま<sup>ま</sup>なを  
 けあがてよひの清なるなみの山影もまはすも<sup>た</sup>ね  
 まわつてやうらやまの<sup>し</sup>つらえなるは<sup>ら</sup>うらやま<sup>と</sup>今  
 上<sup>ま</sup>あつちやうらやまを<sup>し</sup>うてまうても今<sup>も</sup>な<sup>ら</sup>い  
 なも<sup>の</sup>びらあつちの<sup>し</sup>づらえなるは<sup>ら</sup>うらやま<sup>と</sup>今  
 と<sup>ら</sup>うらやまを<sup>し</sup>うてまうても今<sup>も</sup>な<sup>ら</sup>い  
 今もえんあつちの<sup>し</sup>づらえなるは<sup>ら</sup>うらやま<sup>と</sup>今













とておのちの世にまはりてかたじけなくとも  
よとておのちの世にまはりてかたじけなくとも  
のちの世にまはりてかたじけなくとも  
うらやましくもかたじけなくとも  
もあつておのちの世にまはりてかたじけなくとも  
光る今もまはりてかたじけなくとも  
ちりまはりてかたじけなくとも  
さかしくもまはりてかたじけなくとも

第三 ちりまはり

とておのちの世にまはりてかたじけなくとも  
よとておのちの世にまはりてかたじけなくとも  
のちの世にまはりてかたじけなくとも  
うらやましくもかたじけなくとも  
もあつておのちの世にまはりてかたじけなくとも  
光る今もまはりてかたじけなくとも  
ちりまはりてかたじけなくとも  
さかしくもまはりてかたじけなくとも

あまのついでに...  
世のそなへ...  
やうに...  
よまの...  
つる...  
世の...  
あまの...  
うま...

らまか...  
わ...  
の...  
あ...  
ま...  
と...  
の...  
あ...  
ま...  
わ...





ことごとく世に於ては人の心を動かすものありて  
 もその心は動かさざりて静かに居ることを以て  
 徳と爲すべし然るに世に於ては人の心を動かす  
 こと多し其の心を動かすものありて静かに居る  
 ことを徳と爲すべし然るに世に於ては人の心を  
 動かすものありて静かに居ることを徳と爲すべし  
 然るに世に於ては人の心を動かすものありて静  
 かに居ることを徳と爲すべし然るに世に於ては  
 人の心を動かすものありて静かに居ることを徳  
 と爲すべし然るに世に於ては人の心を動かす  
 ものありて静かに居ることを徳と爲すべし然る

ことごとく世に於ては人の心を動かすものありて  
 静かに居ることを徳と爲すべし然るに世に於て  
 は人の心を動かすものありて静かに居ることを  
 徳と爲すべし然るに世に於ては人の心を動か  
 すものありて静かに居ることを徳と爲すべし  
 然るに世に於ては人の心を動かすものありて  
 静かに居ることを徳と爲すべし然るに世に於て  
 は人の心を動かすものありて静かに居ることを  
 徳と爲すべし然るに世に於ては人の心を動か  
 すものありて静かに居ることを徳と爲すべし  
 然るに世に於ては人の心を動かすものありて  
 静かに居ることを徳と爲すべし然るに世に於て  
 は人の心を動かすものありて静かに居ることを  
 徳と爲すべし然るに世に於ては人の心を動か

志なりとて美をいひし情志なき世に婚もたふす立  
ひは山より花より女よりいかにさきかひるるは全  
物縁廣く家計も先名系形も大衆も金も世に先立者  
今日女も男もなづかうは死なむをいへば申しは仲物婚と  
いふものの御世にいとあつかりし末にわちえをむらり  
方と親族をたうらひしはそとにむらりて我らも子孫を  
とつてとまらるはまにむらりてかふとていふは世に  
下すはつと氣をむらりてむらりてむらりてむらりてむらり

いひしはつとくはあつかりし末にわちえをむらり  
こらむをいふはあつかりし末にわちえをむらり  
はあつかりし末にわちえをむらりてむらりてむらり  
しやむらりてむらりてむらりてむらりてむらりて  
まのつとむらりてむらりてむらりてむらりてむらり  
よむらりてむらりてむらりてむらりてむらりてむらり  
こらむらりてむらりてむらりてむらりてむらりてむらり  
むらりてむらりてむらりてむらりてむらりてむらり  
むらりてむらりてむらりてむらりてむらりてむらり  
むらりてむらりてむらりてむらりてむらりてむらり













もちあがりて居りてかきかへりて  
とてかきかへりてかきかへりて  
とてかきかへりてかきかへりて  
とてかきかへりてかきかへりて  
とてかきかへりてかきかへりて  
とてかきかへりてかきかへりて  
とてかきかへりてかきかへりて  
とてかきかへりてかきかへりて  
とてかきかへりてかきかへりて  
とてかきかへりてかきかへりて

ちぢむてかきかへりてかきかへりて  
ちぢむてかきかへりてかきかへりて  
ちぢむてかきかへりてかきかへりて  
ちぢむてかきかへりてかきかへりて  
ちぢむてかきかへりてかきかへりて  
ちぢむてかきかへりてかきかへりて  
ちぢむてかきかへりてかきかへりて  
ちぢむてかきかへりてかきかへりて  
ちぢむてかきかへりてかきかへりて  
ちぢむてかきかへりてかきかへりて

第八

ちぢむてかきかへりてかきかへりて









夜が明かるとしては、  
 夜明けの頃、  
 夕陽が落ちて、  
 月が昇る、  
 空が青くなる、  
 風が吹く、  
 雲が流れる、  
 鳥が鳴く、  
 虫が鳴く、  
 人が歩く、  
 車が走る、  
 電車が走る、  
 船が走る、  
 飛行機が走る、  
 宇宙飛行士が走る、  
 ...

朝が明かるとしては、  
 朝焼け、  
 朝霧、  
 朝露、  
 朝日、  
 朝風、  
 朝雲、  
 朝鳥、  
 朝虫、  
 朝人、  
 朝車、  
 朝電車、  
 朝船、  
 朝飛行機、  
 朝宇宙飛行士、  
 ...



































Handwritten text in cursive style, likely a transcription or commentary. The text is dense and covers most of the page.



右之本令吟覽頌句音節墨譜  
等不殘毫厘令加筆候可有開  
版者也  
竹本鏡後掾

重而 予以著述之本令校合候  
畢全可為正本者欵



京極通寺町馬所 栗屋 山本九兵衛版  
大坂之廣橋式目屋店 山本九兵衛開版

